

## 研究ノート

もの  
造物である詩誌

—ハンセン病をめぐる国立療養所大島青松園での詠歌の結びあいを記録する—

阿部 安成

滋賀大学経済学部

## Reading the Oshimaseishoen Poetry Club Bulletin

Yasunari ABE

Faculty of Economics, Shiga University

We investigated the Library of National Sanatorium Oshimaseishoen and found the Oshimaseishoen Poetry Club Bulletin. I have made a list of that bulletin for the first time at the location.

**Keywords:** Hanse's disease, National Sanatorium Oshimaseishoen, Poetry club

## 1. 歷程追想——はじめに

癩、そしてハンセン病をめぐる療養所での詩などの文学や文芸とは、いったいなにか。大島の療養所について知ろうとするときに部外者が、まず手にするであろう、しかも、在園者自身が編集発行した著書に、『閉ざされた島の昭和史—国立療養所大島青松園入園者自治会五十年史』（大島青松園入園者自治会（協和会）、1981年）がある。同書の「文芸活動の歷程」と題された節には、「開所後四年の大正元年「発句の会」（旧派では俳句を発句とも呼ぶ）が創られた」と記されている（見出しは3項）<sup>1</sup>。1909年の開所から4年後だと1913＝大正2年となるはずだが、それをおくと、同書はこの発会を「入所者の自発的発想ではなかった」と説く。なぜか——当時、「患者」と園側とのあいだで騒動があり、「監護員新設等の取締り強化だけでは、抑えきれぬとみた管理当局は、忿懣粗暴化の鎮撫工作として「文芸と宗教」の奨励策を講じることにした」からだといふ在園者自身が説明したのである。だから、ということであろう、

その項の見出しは、「おし着せの手習いから」とつけられている。これは、謙遜ではなく、有り体の評価なのだともいえる。

ただしそうしたなかでも、さきの見出しに始まる項では、割り当てられた誌面の7割あまりを割いて、「二十余年の蓄積を一気に吐き出すように、昭和3年から20年死去の間に一四冊の著書を相次ぎ出版した」療養者を讃えた。その名は、長田穂波——彼は「島内キリスト教会のリーダーだったから「宗教色濃いもの」と敬遠され、島内では左程よまれず、評価は外部で高まったようだ。健常者に深い感動で読みつがれたらしく“島の聖人”“哲人穂波”などの尊称も、外の人々の言いであった」<sup>2</sup>。「靈魂は羽ばたく」と題された長田の最初の著書は、京都の光友社から1928年に出版された。香川県木田郡庵治村の大島に、癩をめぐる療養所が設置された1909年からおよそ20年の日月を経て、その大島で初めて編まれた刊行物が1冊の詩集だった。彼はおなじ年に、おなじ出版社からたてつけに上梓したも

う1冊の詩集に、「みそらの花」と名をつけた<sup>3</sup>。療養所がおかれた島を生きる療養者がその外で出版した最初の著述が詩集だったのである。

「寸刻も休まず読み書きした真摯な努力と情熱には誰しも舌をまき、畏敬のほかない。当地の開拓史でもあり、文筆の先達記ともいえるので、紙数を費やし紹介した」との讃辞が病友からあたえられる長田の活躍があったと認められながらも、当該期の大島の「文芸」全般はというと、みずからの意思によるのではなく与えられたものにすぎず、かつ、練習の段階にとどまる習作から始まったとみなされたのだった。

その「文芸」は、つづく、「藻汐草」発行と外部指向の胎動」との見出しにあらわれているとおり、1932年創刊の逐次刊行物などをとおして、それ以降、療養所の「外」を見遣り、そこでの動向を意識のうちにとどめ、そこでの交流をあたうかぎりすすめたいとの望みが動きたしたというのである。もっともその見出しがついた文章の末尾には、「以上、旧憲法下の療園文芸のモメントは、われわれも「人である」との認知届けを、他動的状況に託しゆく“請託”の域を出なかった。必死で訴え続ける中だけで、どうにか人並み扱いも見られる程度?の時世だった」と記していた。文字に混じる「?」の記号が、他を意識するがゆえの謙遜と、みずからの未熟さへの率直な不安と恐れと、そして精一杯に押しだしたいくらかの自負とをあらわしていよう。

自分たちの「文芸」をふりかえったところで、「おし着せ」「他動的」といわざるをえない「活動の歷程」が、歯軋りとともに紙面に刻まれたかのようなのである。

それが「敗戦後の転回」(つぎの見出し)を遂げた——「公選権や基本人権尊重の民主憲法が施行され、誰でも自己主張可能となり療園全体の思想や風潮も変わり始めた。目ざましいのは若者の決起で、サークル誌が輩出した」と、13誌と4団体の名称と概要があげられている。

そのなかの1団体が、「青松詩人会」——

結成（〔昭和——引用者による。以下同〕23年）も、その〔「若者の決起」〕最たる一つで、前記若者たちを中心に二十余名の新風集団だった。機関誌も「エチュード」「内海詩人」「海図」と改名脱皮しつつ、異彩を綴った。外部にも注目され、岡山の永瀬清子、東京の大江満雄の両先生の来園指導。高松市「日本詩人」社の理解を得て投稿するなど、各方面の支援鞭撻に励まされ、31年の合同詩集「花虎魚」の刊行も、かなりの評価を得るなどしていたが、40年「海図」44号を最後に、惜しくも解散。／

現在は、短歌から転じた塔和子ただ一人が、全員を代弁して余ほどの驚異的多作で、旺んな意欲と厳しい詩精神を吐き続けており、個人詩集も既に六冊を出版。その中の三巻が、日本現代詩人会の「H氏賞候補」に（48、51、54年）推され、高い評価を得ている。

同人会の逸材としてその紹介の末尾にとりあげられた塔和子はそののち、1999年に第29回高見順賞をうけ、2004年から2006年にかけて『塔和子全詩集』全3巻（編集工房ノア）を刊行する。いま、国立療養所大島青松園（このち療養所の名称をくりかえし記すときに「国立療養所」を略す）の「文芸」といえばまず、塔の名があがるだろうし、一療養所をこえてハンセン病をめぐる療養所在住者の作品としても、彼女のそれが代表としてとりあげられよう。

けれども、塔が属した青松詩人会もそこが発行した詩誌も、また大島で詩集を最初に編集した長田穂波についても、ほとんど知られていない<sup>4</sup>。

さきにみた大島詩人会の「機関誌」は、べつにふれたとおり<sup>5</sup>、かつて『青松』誌上で紹介された、「現在園内で印刷されている〈がり版〉もの」のうちの1誌にあがっていた——「内海詩人 9号 18ページ60部 詩人会発行」(『青松』通巻第92号、1954年7月)。わたしがこの『青松』の記事をみた2011年時点の大島で、『内海詩人』の所在はわかっていなかった。そうしたところ、石居人也がおもに動いて2015年に始めた大島青松園の文化会館にある図書室と書庫の蔵書整理をとおして、2018年10月に、書庫にあった紙袋のなかに、『内海詩人』の継続後誌である『海図』を確認した。

本稿は、癩、そしてハンセン病をめぐる療養所における文学といい文芸という営みがなであるかを考える手始めとして、これまでのハンセン病研究においてまったくといってよほど閲覧すらされてこなかった、その療養所を生きる詩作者たちがいうところの「詩誌」をテキストとして、その書史を紹介するとともに<sup>6</sup>、それらを読むときの論点をいくつか示すこととする。

## 2. 所在判明

大島青松園文化会館書庫で『海図』20号分（重複号なくむ26冊）の所在を確かめたのち、2019年1月にたまたま、国立ハンセン病資料館図書室から同誌の大島での所在確認の連絡がわたしにあり、大島にあった『海図』の号数を伝えるとともに、そこにはない同誌などの所在情報の教示を得た。同室室員の教えるところでは、『エチュード』『内海

詩人』『海図』が欠号をふくみながらも、国立療養所長島愛生園の神谷書庫にあるという。石居もわたしも、同園神谷書庫をいくども訪れ、大島にかかわる史料については悉皆調査をしたつもりになっていたが、見落としがあったということだ。

神谷書庫には、背表紙に「神谷書庫収蔵・全国ハ氏病療養所機関誌一覧／平成6年12月現在」と手書きで記されたファイルがあり、そこに同名の小冊子が含まれている。これは、「開園65周年記念号」として編まれた『愛生』通巻第624号（1995年12月）の221ページから225ページまでの抜刷である（目次には同稿に「(付)」とついていて、これがそのまえの165ページから220ページまでの「長島愛生園「神谷書庫」収蔵図書一覧」の「付」であることをあらわしている。なおこの稿は目次には「収蔵書一覧」と記されている）。この「神谷書庫収蔵・全国ハ氏病療養所機関誌一覧／平成6年12月現在」に『海図』などの掲載はなく、それをもって、わたしたちは神谷書庫には同誌がないとみなしていたところがあったかもしれない。もっとも、この一覧には、長島愛生園であれば「愛生」のみ、大島青松園では「青松」しか載っていないのだから、『海図』などがあるとしてもそこには載らないと推しはかれたはずだ。ただ今回あらためて、「長島愛生園「神谷書庫」収蔵図書一覧」をみると、「詩」という項目があり、たとえばさきにあげた『花虎魚』が掲載されているにもかかわらず、逐次刊行物はいっさい載っていないとわかる。

なお、これら一覧が載る『愛生』通巻第624号の表紙絵は、神谷書庫の外観をとらえている。

『愛生』はさらに、「開園70周年記念号」とした通巻第674号（2000年12月）に「長島愛生園「神谷書庫」収蔵図書一覧」、「開園75周年記念号」の同第724号（2005年12月）に同一覧（目次には「平成12年以降」との括弧書きあり）を載せるも、やはり「詩」の逐次刊行物はそこにみえない。

国立ハンセン病資料館図書室員からの教示を得たところで、これまたあらためて所在状況を調べてみると、香川県立図書館の「香川県内図書館横断検索」により、同館でのみ、「海図13号～17号」がヒットした（2019年2月2日検索。現物未確認）。灯台下暗し、とはいえないが、灯台下あたり暗し、ということか。大島で文化会館の書庫を探らなくても、ハンセン病史研究者であれば、神谷書庫と香川県立図書館とでこれらの詩誌の所在をつかんでおくべきだった。おのが不明を恥じる。

なお、国立国会図書館と日本近代文学館のデータベースでは、『エチュード』『内海詩人』『海図』はヒット件数0だった（同前検索）。

2019年2月末までにわかった上記3誌の所蔵と書誌情報を後掲の目録にまとめた（表1）。神谷書庫でこれらの詩誌は、背表紙に以下の手書き記載とラベルがあるファイルに綴じられている——「エチュード（大島青松園詩謡会）昭和26～27年」「Q／4／16」、「内海詩人 昭和29～30年 No7・8・9・10・12号」「Q／4／17」。

### 3. 詩誌発行

さきにみた『閉ざされた島の昭和史』では、大島詩人会の結成年、同人誌名の変更、「外部」からの「注目」、解散年を短文で簡潔に記したにとどまっていた。他方で、同人誌誌上ではしばしば、みずからの来歴がふりかえられている。そうした記事が報せる発行の経緯をたどろう。

『エチュード』第6号（1952年1月25日）の「あとがき」をみよう（誌名の表記はその表紙にみえたとおりとした）。

◎創刊号を刊したのが一昨年（昭和二十五年）の十二月でした。三号でくたばっていたのを岡山の河野進先生に励まれて、昨年の七月に第五集を出しましたが、其の後、なまけておりました。まことに亀の歩みよりも遅く、汗顔の至りです。「井の蛙大海を知らず」の諺通り、作品は青松へ発表するのが関の山で、その作品たるや幼稚で貧しいものですが、真実と生命を賭けた作品です。皆様の御高評と御感想をお待ちしております。

——さきにみた『閉ざされた島の昭和史』収載「文芸活動の歷程」には、「青松詩人会」の結成が1948年のことと記されていた。同人会結成から数年を経て、同人誌を編集発行することとしたようだ<sup>7</sup>。「あとがき」署名の「T・N」は、中石俊夫とみてよい。

もうひとつ、『内海詩人』第7号（1954年3月15日）巻頭の「モノローグ」をみよう。署名は「中石としお」。

復刊の辞を書くのはこれで何度目だろう。／エチュード創刊号を昭和二十五年十二月に刊し、途中何回かつまずき転びながら号を重ねること六回、二十七年一月以来エチュードは昇天していた。原因は会員のスランプだった。その後、研究会のあるたびに復刊が問題となったが、それを支える会員の作詩が不振の底辺をさまよい続け、今日までのびのびになっていた。しかし会員も詩人のはしくれであった。今こゝにようやく職員グループとスクラムを組み「内海詩人」の旗印をかかげて再びたちあがる

ことが出来た。会員の胸は強風を受けた帆のように大きくふくれている。詩を作って何のたしになるかと笑わば笑えである。醜悪な現実の中で自己を純粹に守り、僕らは詩を愛する。詩は僕らの恋人だ。手に持つ詩の笛の細工は拙くとも、濁りのない音を吹き流そうと思う。

——「現実」の「醜悪」と「自己」に確保されるべき「純粹」さとを対照する装置として「詩」が活用され、それをつくるみずからの「拙」さもまた、自分たちの「純粹」さを担保するはずだとの姿勢が確かめられている。自分たちの稚拙さは隠しようもなく、それへの自覚があるとあらわにし、他方で、自分たちをとりまく「現実」がどうしても「醜悪」であるがゆえに、自分たちの「純粹」さが確かなものとなるとの謂である。

同誌同号の「編集後記」(山本)も、「○多年の懸案であった。「内海詩人」がお粗末ながら漸く発刊の運びに到りました」とその冒頭でまず告げ、ついで、「○同人中、沢葎朗氏は医官、勝賀瀬美佐子さん、面和子さん、香川しのぶさんは看護婦さんで、共に本園の職員で私達のよき理解者であり、保護者であります。其の他の諸氏は青松詩人会々員です」との寄稿者紹介があった。同人会会員である医官や看護婦たち職員は、「スクラムを組む」同人ではあったのだろうが、さて、彼ら彼女たちは「僕ら」に入っていたのか。

『エチュード』第6号には次号第7号の「原稿募集」が載っていたものの、うまくやりくりがつかず「昇天」してしまい、その「復刊」にさいしては「職員グループとスクラムを組み」、誌名もかえてそれを果たしたということである。通巻号数は、『エチュード』から『内海詩人』に引き継がれている。

詩作に集う同人たちは、このつぎにもみるとおり、折りにふれて、自分たちの来歴をかえりみて、それを同人誌に記録している。自分たちの歴史が層として記されているのである。ただし、ただの重ね書きにとどまてはいない。くりかえし過去を想起し、それを記述し、それらを重ねて閲覧することができるように残しているのである。

#### 4. 詩誌復刊

復刊第1号の『内海詩人』第7号には、山沢芳による「内海詩人の発刊まで(その一)」が載る。「青松詩人会」の古い日誌があるという<sup>8</sup>、それを参照して、山沢は往時をふりかえる——

一九四八年一〇月五日発足す。とある。／その当時は詩を

作る人は居つても特定の会は無かったようである。精励に作詩を続けていた者は一人か二人であった。その頃文芸愛好者の中の、土谷〔勉〕、小見山〔和夫〕、浅野〔繁〕の諸氏の計らいで現在の「青松詩人会」がほそそと歩み出した。／その当時の日誌から断片的に拾ってみたい。／第一会員(詩謡部)中石、山沢、古名、上野、加村〔翠巒か?〕、小西〔和夫か?〕、戸田、岩瀬〔弘美か?〕／第二会員(創作部)土谷、浅野、小見山、浅山(故人)赤沢〔正美〕、谷脇〔徹〕、斉木〔創〕／と書いてある。／どうしてこのように第一、第二会員と云ったのか解らないが、とにかく連立詩謡会と云った型のものであった。とにもかくにもその当時自力でそして自立によって詩と取組む意志の弱さから、創作会員も加えた一つの支えとも云えるではなかったのであろうか。／現在、その当時の第二会員は「文章会」を組織してその研磨努力を続けている。第一会員はその後、作詩を中止したり、その後また新しい会員を加えて、現在は十二名である。

——わずか6年まえともいえるていどの過去のようすが、もはやわからなくなってしまったか。そして、1950年

十二月五日。／“エチュード”と称して、これから作詩を研究する。毎月二回。これを行う。／会合の都度、作品を持ちよって、朗読しお互いに批評し合い乍ら作詩の向上につとめようとした企図から出たものだった。読むだけではピンとこない感があり、聴覚から視覚に訴えようとする現代詩の見方から、各人の作品を印刷してそれによって自分の一ばん良いと思う作品に点数をつけて、最高点から順次に批評し、感想を述べていた。これは、どこまでも習作或は練習詩でありこれを修正の上「青松」に発表する程度だった。この当時が会員もみんな気を構えて最も熱の入った時とも考えられた。これも第三号で自然停止の形になり、各人の不勉強の現れであり、またしばらく空白が続いた。

という(山沢芳「内海詩人の発刊まで(その二)」『内海詩人』第8号、1954年4月20日)。

会員数も第9号(1954年5月25日)発行時には、「十八名」に増え、「そのうち職員が六名、うち看護婦さんが四名」となった(山沢芳「内海詩人発刊まで」同誌第9号)。

療養所を「どん底」と形容し、そこでのようすを「人間が鬼畜のように扱われ」「人間扱いはされない」「身体は虫同様に扱われ」「身体は囚われの身となろうとも、獣のごとく扱われようとも」と喩える局外者がいる(前掲安宅『命いとおし』)。ハンセン病を病み、療養所に暮らした当事者



には、みずからの実感として療養所のようなすをそう喩えて非難する資格がある。だが、ハンセン病にも罹らず、療養所に隔離されたことのない非当事者がそうした喩えをただなぞるばかりだと、これまた療養所在住者たちの集いのなかで詩誌を編み、そこにとどめた療養所内の交流についての記述を抹消してしまうこととなる、とわたしは怖れる。

誌名が『海図』となり、ただし通巻号数を継いでいる第13号（1956年2月5日）の[あとがき]（目次に記載があるだけで本文の稿題にはない）をみよう——

○随分と本当に長い間休刊しておりました。“内海詩人”が、今回“海図”と名称を替えて、気を取り直して再発足することになりました。

とその冒頭にあるとおり、前号12号が発行された1955年1月から1年以上あいだが空いた「再発足」だった。会員もさらに増えた——「○今回は、新しい会員を加えて、[中略]当園の看護婦さんがその方々」だ。また、「○今回“海図”として再発刊するに当つて、当園の田村〔敏光〕係長が、この私達のささやかな企画に、深いご理解をいただき、印刷と製本の労を自づからとつていただくことについて、私達は深く感謝しております。田村係長は、退庁後や日曜日を印刷に当て、少しでも良い詩誌の作製に努力していただくことになりました」と、職員の協力を得ての「再発足」でもあったのだ。

『海図』最初のこの号に、中石としおによる「復刊によせて」が載る。中石はその冒頭に、さきに見た、『内海詩人』第7号「モノログ」を転載して稿を起し、それを「書いたのが一昨年三月のことであつた。それから休み休みに号を重ね、昨年一月に第十二号を刊したまゝ、「内海詩人」は今日まで沈没していたのであつた」とかえりみた。「昇天」したかとおもえば、こんどは「沈没」を体験したところで、「もう再び恥じらいながら復刊の辞等書きたくないと、ぼくは考えている」との決意をかかげ、恵美かおるたちとの「相談の結果、新しい出発に際して、「内海詩人」という老朽船は廃棄して「海図」という表題に改めた」と説く——「混沌とした現実のなかで、ぼくらは一枚の白紙に新しい「海図」を書こうというのだ。ぼくらの体験した海底の深淺、海底の性質、岩礁の位置、潮流の方向等を詳細に記載するのだ。そして新しい航路標識を記入するのだ」との宣言がみえる。

## 5. 活版印刷

『海図』第23号（1958年8月5日）から活版印刷へと

かわる。これを同号の編集人は、「永年私達が夢見ていた活版印刷へと第二十三号より一大飛躍（形の上では）を試みた訳である」といいあらわした（山本いわお「海図」の生いたち）。印刷様式だけでなく、活版化にともない、隔月刊から「季刊」（1月、4月、7月、10月）へと発行回数をかえることも試みるという。隔月刊といいながらもそれがしっかりとくりかえされたわけではないのだから、発行回数は減るにしても確かに刊行をつづけてゆこうとの意思がそこには籠められているのである。この「飛躍」のときにたどられたみずからの「生いたち」をみよう。

まず、「戦後の詩誌発行熱は熱病にとりつかれたような感があつた。小さい職場や、療養所の片隅から出されたガリ刷まで入れると夥しい数になると思う。そして、その多くは三号雑誌の憂き目に遭遇して喘えなく散つていつたことであろう」と、「大衆に歓迎され難い詩誌を発行し育成してゆくことの難しさは、その任に当つた者の等しく痛感するところだ」と思う。私達の「海図」も亦その例外ではない」との苦難の時代がふりかえられながらも、しかし、みずからの同人誌はいわゆる「三号雑誌」に終わりやしなかつたとの矜持もあらわされていよう。

「海図」の母体である青松詩人会が結成されたのは昭和二三年であり、「海図」の前身である「エチュード」が創刊されたのが二五年十二月であるから、胎動の苦しみを少くとも二年間要した訳である。／「エチュード」は西洋紙四ツ折大の極めて貧相なものであつたが、生みの喜びは秘すべくもなく、隔月刊の目標に従つて何なく三号雑誌の難関を突破し、すべり出しの上々を喜ぶのも東の間、原稿難と印刷難（ガリ刷）のために二七年一月に第六号を発行後休刊の止むなきに至つた。

その「エチュード」を復刊するとの念願は、「心機を一新する意味に於てその名も「内海詩人」と改め、二九年三月第七号より再出発すること」としてかなう。しかもこの再刊で「特筆すべきことは、それまで病者のみで出していたのを職員（医師看護婦）にも参加して頂くようになったことと、A五版の一応雑誌としての体裁を整えたこと」と示された。

しかしこの刊行もまた、「順風に帆を張り波静かな瀬戸を航海するかにみえたのも僅か一年、三十年一月第十二号を発刊後、前回と同じ難関に遭つて亦も坐折してしまつた。／内海の暗礁に乗りあげ、やがて沈没し海底のもくずと化してしまうかにみえた」とそのなりゆきを喩えざるを得なかつた。これもさらにまた、「全員の努力によつて漸く離

礁に成功したのは一年後の三一年二月だった。内海だからとたかをくくり海図もコンパスも無しに航海に出帆した甘さを恥じ、誌名も三転し、第十三号より亦しても「海図」と改めて再度出発したたのである。この「海図」出発の原動力になったのは、職員のTさん始め有志の方々が、献身的に印刷製本の労をとつて下さったことであり感謝に堪えない」と記すことを忘れなかった。ここにいう「職員のTさん」とは、『海図』第13号の奥付に「印刷人」としてその名が記された、田村敏光を指そう。

では、活版印刷はどこでおこなわれたか。第23号奥付には、「印刷人 倉石三郎」とのみ記され、おなじページの「あとがき」（山本）にあらたに導入された活版印刷についての記述はない。この倉石三郎の名は、たとえば、大島青松園の青松編集室で保管されている『藻汐草』の合本製本版奥付に、「大島青松園／創立五〇週年／記念合本／高松市松島町四ノ三六一番地／製本 倉石三郎／香川県大島青松園／協和会文化部」とみえ、また、同園社会交流会館所蔵「歌句詩文庫（仮称）」にある、『句集 聖痕』（邱山俳句会、1959年）では「印刷人」としてその名が奥付に記載されている。邱山俳句会は大島青松園内の同人会。同文庫の奥付に倉石の名がある図書はこれ1冊のみ。

「高松市松島町四ノ三六一番地」はどこか。同文庫の蔵書を見ると、『句集 東風 第二輯』（大島青松園邱山会編、野島泰治発行、1953年）の「印刷人」が「高松市松島町三六一番地／近藤貞三」、『句集 四十代』（辻長風、1954年）の「印刷者」が同前、『句集 火星 第二輯』（編集発行火星俳句会、1965年）の「印刷者」が「高松市松島町三六一／村雨政雄」とわかる。辻長風も火星俳句会もその所番地は、大島青松園のそれ。『海図』も第30号から「印刷人」が村雨政雄となる。大島で編集発行された刊行物の印刷にかかわる近藤貞三、倉石三郎、村雨政雄はどういう人物か。同文庫には、村雨政雄が印刷にかかわった図書が複数冊ある。そのなかの1冊、長島愛生園と所番地をおなじくする著者による『合同歌集 海光』（長島短歌会著、1980年）の「印刷」は、「村雨政雄／高松市松福町二ノ一六ノ六三」——この所番地は、高松刑務所のそれである。

## 6. 先行事例

大島で編集発行された逐次刊行物『青松』の印刷をみておこう。「この一月号を期に本誌を月刊にすることが出来ました」という同誌通巻第74号（1953年1月）は、前号（通巻第73号、1952年12月）の「印刷所 玉藻紙業」（高松

市田町129番地）から、「印刷人 近藤貞三」へと印刷の発注先をかえた。「減頁」「月刊」そして業者の変更もふくめて「印刷事情を転化」とあらわしたのである。同誌通巻題124号（1957年5月）から奥付の表記が、「印刷者 倉石三郎」へとかわり、さらに同第157号（1960年5月）は「印刷者 村雨政雄」となる。

『青松』通巻第167号（1961年5月）の「あとがき」（斉木創）は、「ご覧のように、本号から内容紙を格上げしました」と宣言する——「体裁よりも内容の充実が第一なのは云うまでもありませんが、読み易くして読者の注目や印象を良くし作品を一層引立ててゆくの雑誌の機能であり、レイアウトの必要もそこにあるといわれます」と変更の意義をとらえた。そしてかえりみると、「本誌は終戦直後の創刊以来、粗末なザラ紙で通してきたが、新聞よりも見苦しい紙面では読む気をもそゝりにくいし、今日の出版常識ではケタ外れなので紙質改良は年来の宿望でしたが、このたび印刷所の村雨技官（高松刑務所作業課）などの格別のご配慮により、遂に実現を見た訳です」と示した。

現在、高松刑務所では「刑務作業」のひとつに業種「印刷」があり、その工場数は1、就業人数は35、「主な機械設備」に「小型オフセット機、ミシクロス折機、自動断裁機、オフセット印刷機、コンピューター組版機、自動丁合機、動力式穴あけ機械」があり、「主な作業内容」として「チラシ、伝票印刷、冊子、薬袋、封筒印刷、名刺・はがき印刷」をあげている（同所ホームページ、2019年3月8日閲覧）。過去にさかのぼって、ハンセン病をめぐる予防法体制下でも、こうした刑務作業の一端として、大島青松園を編集発行の地とする刊行物の印刷を担っていたのである。これは、伝染病隔離施設内で編集発行される刊行物だから、その印刷を刑務作業としておこなっていたということではないだろう。現在のことではあるが、地方国立大学法人が地元の刑務所に印刷業務を発注することもある。安価であることが、印刷製本に刑務作業を選ぶ理由なのかもしれない。

逐次刊行物を発行しつづけるには、それ相応の資金が必要となる。自分たちの作品を載せる造物である誌そのものを、自分たちの趣向にあわせて整えてゆくとき、それを実現するための設備と費用がなくてはならない。機器も設備も療養所内でも島内でも調達できないとなれば、自分たちが賄い得るそれらを療養所外で物色することとなる。

## 7. 消毒処理

療養所の外で整えられた造物である誌を、療養所の外へ贈りたくなれば、それは人情のなすところといえよう。そのとき、どういった手続きが必要となったか。

たとえば、東京全生病院内で編集、印刷、発行されていた逐次刊行物『山桜』には、その表紙見返しに、「祖国日本を癩の悩みより救ひ、外なる病友の救はれる日の早からん為に、／吾等は切なる念願を以てこのさゝやかな雑誌を世に送る。／この原稿は勿論、印刷、製本まで吾等の手になりしもの。／係員に依りて完全に消毒されてある」と印刷してある（たとえば、同誌第14巻第5号、1932年5月）。わたしはいまのところ、大島の逐次刊行物『霊交』『藻汐草』『青松』にそうした印刷表示を確認していないものの、『青松』通巻第146号（1959年5月）の表紙見返しには「郵便物などはこの消毒機「S・K」で完全滅菌を経て発送される」とのキャプションがついた写真を載せ、次号同第147号（1959年6月）ではその写真が表紙に載り、目次で「表紙・郵便消毒機」と報せていると知る。隔離施設のなかからその外へ郵便物を送るとき、もはやハンセン病が治る病になって久しい1950年代末になお、「完全滅菌を経て発送される」との配慮を、療養所に暮らすものたちは「社会」にむけてみせなければならなかったのである。

さきの『青松』表紙見返しに載った消毒器の写真は、園長野島泰治の稿「創立五十年を迎えて（二）」（47ページ）の、挿絵として掲載されたものとみてよい。野島は記す――

開所当初から問題になったのは郵便物の消毒と云うことである。初めは簡単なフォルマリン消毒器を使用したのが、昭和の初め頃からSK真空消毒に代つた。器械の故障があると蒸気消毒にすることもあるが、そうすると文字がにじむので度重なりと受取つた方で不審がられる。昭和の初め頃までは患者地帯から出る郵便物は「消毒済」なる検印を押した時代があつた。昭和の中期頃一時外国のスタンプの如く外国語でデスインフエション（消毒の意）の検印を押したこともある。現在の如く外国郵便の往復が頻繁であると怪しまれずに済むのであるが当時はこれも問題になつてやめた。郵便局迄一まとめにして其の帯封に横文字のスタンプを押した時代もあつたが昭和下半期からはこれも中止した。終戦後病者協和会などから各種の請願書類が出ることもあるが、受取つた方では恐れをなして中味は録々見て呉れないと云う噂もあつて特別なものには消毒済と云うローマ字の印を押すことに申合せが出来ている。実害はないと云つて見ても社会は中々

理解して呉れない。消毒ズミの検印を押しても嫌がられ、押さないでも恐れられる。これこそライ特有の悩みであろう。〔中略〕／孤島の生活での楽しみは家郷の人々、知人なんかの社会からの文信の音づれであるが、此の大島への郵便物は地許の庵治郵便局を経由して舟で島へ来る。五十年の間、特別荒天の日以外は毎日つづいている。この郵便やさんは文字通りの小島通いの郵便船で職員患者一同感謝のまどである。

## 8. 郵便事情

ここで、島の郵便をめぐるようすにも、かんたんにふれておこう。『青松』通巻第161号（1960年10月）の巻頭に載る「園内スナツプ」5葉のうちの1葉に、「海から郵便さんの上陸。／写真の多田さんは多年通勤の功労者として昨年の50周年記念式に園全体から表彰された」との記載がある<sup>9</sup>。

1959年11月10日に催された「青松園創立五十周年記念式典」では、「園外篤志功労者表彰」対象者11名のうちのひとりに、「多田重吉（庵治村 元郵便物集配人）」がいる。おなじ表彰をうけたひとり河野進（「玉島市 牧師、詩人」）は同号に、「郵便のおつあん」と題した稿を寄せた。そこには、「郵便のおつあんの愛称で／大島青松園の患者や職員から／家族のように親まれていた多田重吉さん／暑い日、寒い日、雨の日、風の日／つもりつもつて三十余年／ぼんぼん船をあやつつて／島へ郵便物を持つて来る／不幸な孤独な病人だけが知る／うれしかったより悲しかったよりや季節の小包が／無口で小がらなおつあんの／黒い鞆をふくらませている〔中略〕／七十三才の老人になつて局をやめ／去年から息子が引きついでいるのも心強い／〔後略〕」とみせられている（『青松』通巻第153号、1960年1月）。

同誌第174号（1961年12月）の「後記」（署名は斉木）に郵便への憤懣が載る。療養所における郵便事情を瞥見しよう――

『郵送料が高くなつたので、本はなるべく近くの書店で買つて下さい』との添書きが一流書店や雑誌の広告にも出てきた。療養所の出版物が郵税に阻まれ出にくくなるのも無理はない。特に患者同志で出版費を出しあう文芸同人誌などは五種郵便なので、目方を50グラム単位に半減した上の値上げは実質倍増以上の負担となり、部厚い本では出版費と同額位いにもつくのでバカバカしくさえ思え、折角の勉強意欲や好ましい姿勢も、切手代捻出に困つて挫折しやすい傾向も出ている。点字や盲人団体



の録音テープは無税になったが、そうした特免でなくとも、療養者の出版物位は「郵税据置」を主張してくれた血の通う政治家はいなかつたのであろうか。と云つていたら仲間の一人から「それどころか、値上げした新料金の切手さえ回わず、何枚もの抱合せ使用を強制され、手が悪く裂き損じては郵政省にバカられるばかりで腹が立つ」と憤懣を聞かされた。全くその通りである。隔絶された療養者のただ一つの出口である郵便ぐらいは圧迫しない善政を望んでやまない。……

第五種郵便物扱いであるとは、年に一定回数以上刊行される定期刊行物の第三種にも、学術刊行物などを内容とする第四種にも認められなかったということだ。同人誌を発行するとき、その郵送を望むのであれば、重さをふまえてページ数に配慮しなければならなかったのだ。「隔絶された療養者のただ一つの出口」をめぐる切実な問題が郵便にはあった。

その稿の末尾、さきの引用の三点リーダーにつづいて、「その郵便を24年間、海を渡つて集配してくれた“郵便の多田さん”が先日亡くなられた。先の本園50周年には功労者代表として表彰状を贈つたが、更に追善の表彰方や、一同の謝意を霊前に手向けて、一入その逝去を惜しみ悼んだものである」と故人を偲んだ。「郵便のおつつあん」は、「隔絶された療養者のただ一つの出口」を行き来する、外と内とを橋渡しする媒でもあったのだ。さきの「園内スナップ」の写真は、右肩に大きな袋を担ぎ、左手にもいくつもの荷を持つ「郵便さん」をとらえていた。退職、そして表彰からわずかな年月での逝去は、いっそう惜しまれたことだろう。

第14号(1956年3月25日)の時点で、「『海図』を外部へ二十部ほどお送りしています」(中石としお「あとがき」)という。この号は、島外ではいまのところ、長島愛生園神谷書庫と香川県立図書館にある。「二十部ほど」のうちの2冊も、「郵便の多田さん」が運んだはずだ。

在園者との会食のなかであるとき、彼らが魚や貝を採りに海に潜った昔語りとなり、それがとてもたのしい思い出だと聞いた。ただ、いっしょに潜った職員も、郵便物を渡すときには、その端っこをつまんで放り投げたという。職員が在園者に渡す郵便物は療養所外から送られてきた封筒や葉書のはずで、それらを汚穢とする所為は極めて理不尽だと弾じたうえでさらにくわえれば、療養者の持ちものであれ触れたものであれ、それを汚穢とすることにもまた、わずかな理すらもない。

「郵便のおつつあん」は、大島から送られる郵便物の消毒の有無が気になっただろうか。

## 9. 隔絶の表象

ここで、療養者自身が用いた「隔絶された」との表現を考えておこう。さきにみたこの語はこののち、1982年に刊行される「長島愛生園入園者五十年史」の副題をもつ史誌にも使われる——「隔絶の里程」がその書名である(日本文教出版)。その前年1981年に大島で刊行された「国立療養所大島青松園入園者自治会五十年史」を副題とする史誌の書名が「閉ざされた島の昭和史」。自分たちが暮らす療養所は、彼ら彼女たちがいうところの「社会」からひどく隔たり、閉ざされた場所だとの実感が当人たちにはあった。その隔たっているとか閉ざされているとかいうその実感は、なにが支えているのか。

療養所がある大島のばあいまずは、それが海である。その海を渡る船にも、患者とそうでないものとの居場所が分けられていた。その船によって運ばれる郵便物もまた、消毒をするものとその必要のないものに分けられ、スタンプが押されるなどその区分が明示されていた。療養所のなかでもさらに、患者がいる(ことのできる)場所と職員がいるところとが分けられ、その境界が地図上ではたとえば一点鎖線で、そして現実の大島では有刺鉄線などによってだれの目にもみえるように定置されていた。だれもが信仰によって集い、ときに信心のないものでもその場にいることのできるはずの教会においても、入口が分けられ、祈りの場がべつに設けられていたのである。海、船、郵便物、島土、会堂が、それをみるものを、そこにいるものを、自分が隔てられている、分けられている、閉ざされていると感じさせるのである。

けれども、隔てられ、分けられ、閉ざされた当事者たちは、ただ唯唯諾諾とそれをうけいれ、甘んじていたわけではない。海に船を出せば、強い屈辱をうけいれさせられる、一般乗客と異なる車輻に押し込められるいわゆるお召列車に乗らなくても、岡山の長島へゆくことができた。もとよりその船すらも「職員席」と「患者席」とに分けられていたかもしれない、そこは快適に過ごせる空間とはかぎらないのだが。海はまた、魚や貝を採る漁場でもあった。採った蛸を包帯でしばって腰に結わえたと在園者から聞き、療養所らしいとおもったことがある。生業とまではゆかなくとも、海に潜り、魚や貝を採ることでみずからの生を実感し、ひとといっしょにそれをするよろこびを知ったかもしれない。



## 10. distinction

『海図』第40号（1963年2月1日）は「四十号記念特集」を組んだ。その「あとがき」（署名黒田）は、「一年には正月というけじめがあるように、詩誌にもけじめがあつて然るべきだ。そんな意味から、四十号までに版を重ねた『海図』の、よく続刊し得た記念と、新たな年を迎えるに似たけじめとして特集号とした」（傍点原文）との宣言がみえる。「けじめ」の語を3度も記し、そのうち2度もわざわざ傍点を打って使っている。ここには、たんなる、分け目や仕切りにとどまらない区切りが想定されているのではないか。「『海図』の歴史を繙いてみると」と始まるその歴史を「あとがき」にみよう。

青松詩人会結成が昭和二十三年。「エチュード」創刊が昭和二十五年十二月。同二十七年一月、第六号で休刊。「エチュード」は西洋紙四ツ折大の極めて貧相なガリ刷、原稿難と印刷難で止むなく二年間休刊となつている。その後名称を改め再出発。「内海詩人」昭和二十九年三月、第七号再刊。同三十年一月、第十二号で休刊。「内海詩人」はガリ刷であつてもA五版となり一応詩誌の体裁を整える。又職員も同人として加わつたとある。休刊理由はエチュードの場合と同じで一年休刊。再度名称を改め再出発。「海図」昭和三十一年二月、第十三号発刊。ガリ版印刷製本の労を、職員のTさん始め有志の方々によつてなされ、それが発刊の原動力になつている。その後昭和三十三年八月、第二十三号より現在の活版印刷と続き四十号の発刊迄に至る。尚「エチュード」「内海詩人」「海図」ガリ版印刷時代は隔月刊であつたが、有名無実に終つていたので、活版になるやそれを改め、一月、四月、七月、十月の季刊発行となつている。

——「特集」といっても、なにかとくに主題を設定したわけではなく、「特集・40号によせて」との課題をかかげて、療養所外から3名の寄稿——広瀬志津雄「『海図』の帰郷について」、十国修「『海図』のみなさんへ」、永瀬清子「手紙」と、在園者2名——朝滋夫「明日のない風景」、塔和子「駿馬・外一篇」の詩を載せていた（「目次」より）。

創刊から12年あまりで2回の「休刊」と「再出発」と誌名の改称を経た40号の刊行は、同人たちにとって深い感慨があつたことだろう。そうした年月の長さとそのかんの変化をかえりみながらの詩作であり、局外者からの評が、このとき編まれたのである。

第40号「あとがき」を執筆した黒田は、誌名が『海図』となったときに掲載された中石の文章を引用したうえで、

「沈滞気味な同人諸君」に「新たに權を持ちなおし、より次元の高い『海図』にしようではないか！！」と呼びかけた。「ぼくら」の停滞をこのさき打開してゆくために、いまの「ぼくら」につらなるひとつの始まりとして「一枚の白紙に新しい『海図』を書こう」「新しい航路標識を記入する」というあのときの決意が想起され、「ぼくら」を再生させようとするけじめが、「ぼくら」の歴史に穿たれたのである。

しかし、さきにみた『閉ざされた島の昭和史』が示すところでは、大島詩人会は「40年『海図』44号を最後に、惜しくも解散」したという。いま残る『海図』の最後の号は第44号で、その発行は1964年3月5日、さきの記録とは発行年がずれている。『塔和子全詩集』第3巻収載の「未刊詩篇」には、1964年9月発行の『海図』に載つたという「対話」と題された1編がある。『海図』最終刊の号数と発行年月をいま、確定することができない。

## 11. 誌面連繫

さきにみたとおり、『エチュード』第6号（1952年1月25日）「あとがき」に、「作品は青松へ発表するのが関の山で、その作品たるや幼稚で貧しいものですが、真実と生命を賭けた作品です」との自負がみせられ、また、『内海詩人』第8号（1954年4月20日）に載つた山沢芳の「内海詩人の発刊まで（その二）」には、「どこまでも習作或は練習詩でありこれを修正の上“青松”に発表する」とのいわば誌面連繫のようすが記されていた。

そうした連繫の一事例をあげると、『エチュード』第6号に載る島内真砂美の「山羊」と題された詩が、そのまま『青松』通巻第69号（1952年3月5日）にみえる。このときすでに『青松』は、高松市田町の玉藻紙業がうけおつた活版印刷だった。島内の作品「山羊」が載る『エチュード』と『青松』との発行月のあいだがわずか1か月あまりであり、また、修正がないところからすると、このばあいは、『エチュード』に載せるとともにその原稿を印刷所へもまわしていたのかもしれない。

詩作者たちが「夢見ていた活版印刷」が、となりの芝生に喩えられるちかさにあつたわけで、自分が詠んだ詩が活版で誌面に印刷されるとは、このうえない喜びであり憧れだったのであろう。『青松』の活版印刷第1号（印刷所は玉藻紙業）は、通巻第47号（1949年1月1日）で、このとき大島に詩誌はなく、詩作者たちは『青松』に寄稿していた。同号には島外の河野進が選んだ作品5編が載つた。そ

のなかの佳作1編が、井上和子の「孤独」。これへの河野の選評は、「表現がおもしろいし一応まとまっているが着想が清新な感じを与えないのは惜しい」と厳しかった。つぎの号（印刷表記は「通巻四十七」、同年3月1日）に載ったやはり河野選による9編のうちの1編が、井上和子の作品「深夜」。これに河野は、「ゆうれいと見しは枯れ尾花、を新しい革袋に盛つて或る程度成果をあげ得た一作、療園という背景が大きく物をいつている。療園独自の文学を生み出すことに懸命の努力を払われることは諸君の大きな使命である不朽の一作を遺し得るならば又以て瞑すべきではないか」。さきの「井上」も「井土」の誤植とみてよい。これは塔和子である<sup>10</sup>。

そのつぎの同誌通巻第49号（同年6月1日）にも、井上和子の詩「真実」が載る。河野の選評は、「これはあまりむきになつているからちよつと近寄れない。之は成功すると素晴らしいがめつたに成功しない、ちよつどヒットラーや東条の行き方である。誰でもこうした一途につきつめた純情を懐いていた時代があつたことを回想する記念碑として之はまた捨て難い」。のちに高見順賞をうける塔の修業始めの作品ということか。

なお、『塔和子全詩集』第3巻収載「未刊詩篇」には、『海図』に掲載された塔和子の作品のいくつかがおさめられていない。塔和子をきちんと知ろう、ていねいに考えようとするのであれば、『海図』や『青松』に載る彼女の詩や文章をたどるとよい。

## 12. 詩誌評釈——おわりに

『内海詩人』第7号（1954年3月15日）巻末に載る「会員募集」には、「○会費一ヶ月二〇円／一三ヶ月分前納／○会員は自由に寄稿できます。／○人間であれば誰でも入会出来ます。／○内海詩人編集部までお知らせください」との呼びかけの文辞がみえる。このなかではとくに、その第3項が目をはく——「人間であれば誰でも入会出来ます」とは、気負い、意気込み、決意が溢れるばかりに漲る勧誘文言である。その一方でここには、すでに治る病になっているにもかかわらず、依然として隔離予防体制がつづく理不尽への強烈な異議がとなえられてもいる。

『エチュード』の発行が止まり、『内海詩人』と誌名があらたまる詩誌ができるまでのあいだに、「らい予防法」が公布され、即日施行されている（1953年8月15日）。これにともない、その翌9月に「次官通牒による「患者療養心得」（全24条）が「国立らい療養所長」に宛てて通達

され<sup>11</sup>、療養所在園者からは、「全条の四十パーセントが療養者としての常識として現在実行されていることであり、あとは取締強化の規律である。集会、結社、出版、言論等々の自由の拘束が明らかにうたわれている」との反発が示される（あさのしげる「編集後記」『青松』通巻第84号、1953年11月10日）。『青松』誌上ではさらに同年12月10日発行通巻第85号の、まき・こうじ「『患者療養心得』に対する検討一法のための人ではなく、人のための法でなければならぬ」で、よりいっそうの異議が言述される。

こうした事態が展開する療養所において、文学といい文芸という営みとは、いったいなにであるのか——こうした問いを当事者たちはくりかえし自問してきた。療養所を生きるものにとって、詠歌とはなにか、そこで詠まれた歌とはなにかについて、個々に、また、同人という集合態として考えてきたのである。詩も短歌も俳句も川柳も、どれも、ひとりで、いつでも、つくることができる。それが多くの療養所で、詩人会や短歌会が結成され、個々に、いつでも駆使し得る技芸をわざわざ、設けられた共通する時間と場所において、そこに結ばれた集合態を介して、その成果を発信してきたのである。

ところが療養所の局外者たちはおうおうにして、そうした集合態の営為に目を凝らすことなく、個別の作品をつくり得る療養者として個々にとりあげ、つくり手を取りまくいくつもの交流を切断してしまう嫌いがあり、他方で、「文芸とくに短歌指導を行」ったことがその略歴にあげられる内田守人（守）や、「全国のハンセン病療養所に暮らす人びとと詩作をとおして交流を続けた詩人」と評される大江満雄は、療養者のなかに歌人や詩人という集合態をみてきたといえる（会員や同人の一覧は表2参照）<sup>12</sup>。

この療養所内の集合態をめぐって、そこにある複数の世代や複数の表現様式を介した交流をとらえるとともに<sup>13</sup>、あわせて、療養所外の人びととの交流のようすを<sup>14</sup>、とりわけ「指導」という領分においてつかみ、その成果なるものが療養所在住者にどのように再帰するのかをもみすえる必要がある。

（附記）本稿は、2018年度科学研究費助成事業基盤研究（B）（一般）「近現代日本における病者・療養者の生」（研究代表者一橋大学大学院社会学研究科石居人也）による成果のひとつである。

注

- 1 この「文芸活動の歷程」は、阿部安成「療養所の歴史を縁どる一過去との綾取り（59）」『青松』通巻第705号（2019年4月。2019年2月3日原稿提出）でもふれた。『青松』は「国立療養所大島青松園協和会」（自治会）を「発行者」とする逐時刊行物。
- 2 長田穂波については、阿部安成『島で一ハンセン病療養所の百年』（サンライズ出版、2015年）第IV章を参照。
- 3 『みそらの花』掲載の詩の一部がのちに英訳される（阿部安成「読めない詩一癩療養者長田穂波と訳詩者ロイス・エリクソン」Working Paper Series No.202、滋賀大学経済学部、2013年9月）。大島での療養者の詩作を考えると、この英訳がひとつの重要な論点となる。
- 4 安宅温『命いとおし 詩人・塔和子の半生一隔離の島から届く魂の詩』（ミネルヴァ書房、2009年）には「塔和子を長い間導き続けた詩人、大岡信氏」「詩の師匠、赤沢正美」「詩をつくるうえで、赤沢正美が無くてはならない批評家で、師だと聞いていた」との記述があるが、大島詩人会やその同人やその詩誌については一言の言及もない。「自治会の働きによって、待遇もいくらか改善されて〔中略〕入園者も各自、趣味に活路を見出すものも多くなった。特に、短歌会、俳句の会、川柳の会などは、人気があったようである」と記し、前掲『閉ざされた島の昭和史』を「参考資料」にあげながら、大島詩人会をとりあげない展開が不思議だ。また同書は塔の信仰についてもまったくふれもしていない。「塔和子の世界」と題された章をふくむ森田進『詩とハンセン病』（土曜美術社出版販売、2003年）もおなじ。ただし後者には「塔和子の歩みを地味に的確に見つめている中・四国の詩人」や「塔和子は、キリスト教を媒介して、日本の自然を見つめつづけ」といったわずかな目配りはある。近刊の木村哲也『来者の群像一大江満雄とハンセン病療養所の詩人たち』（編集室水平線、2017年）は第6章「語られない体験を詩に託して一大島青松園 中石としおさん、塔和子さん」において中石の略歴として「園内で詩誌『エチュウド』『内海詩人』『海図』を主宰」と記しながらそれらを閲覧していないとおもわれる。木村は同書に示したかぎり1996年～2000年、2002年のハンセン病をめぐる国立療養所での「聞き書き」をもとに同書を執筆した。
- 5 阿部安成「療養所の歴史を縁どる一過去との乱取り（11）」（『青松』通巻第657号、2011年4月）。
- 6 書史論については、阿部安成「島の書、書の園一国立療養所大島青松園をフィールドとした書史論の試み」（『国立ハンセン病資料館研究紀要』第2号、2011年）と同「書史を伝えること、書史から考えること一国立療養所大島青松園で蔵書目録をつくる」（同前第6号、2019年）を参照。
- 7 前掲木村『来者の群像』収載「大江満雄とハンセン病療養所の詩人たちに関する年譜」にある「一九四八年―一〇月 詩誌『エチュウド』創刊（のちに『内海詩人』『海図』へと改称）。〔大島〕」との記載は同誌創刊号を未見だが誤りとしてよい。またわたしは「エチュウド」という表記を確認していない。木村が「参考文献」としてあげた、中石としお「新しい出発のために」（『青松』通巻第120号、1957年1月）に「ぼくらの詩人会が生れたのは昭和二十三〔1948〕年十月でした」との記述があるも詩誌創刊年は記されていない。
- 8 大島詩人会の運営を担った在園者のひとり中石俊夫の逝去後に、同人の後見人から遺品をあずかったというひとから、そのなかに同会にかかわるものがないとの情報を2019年3月に得た。
- 9 「開園50周年記念号」の『青松』通巻第151号（1959年11月）掲載「青松園50年点景<誌上記録>」には、「32年2月所内に公衆用「電話ボックス」を寄付金で設置した。／島外とも通話できる画一的な向上進歩であつた」のキャプションつき写真があり、そこに赤い色が塗られているであろう円筒形の郵便ポストも写っている。同号掲載の、あさの・しげる「諸般事始」には、「公衆電話設備」の項があり、「（一九五八、二、一〇、昭和三年）三箇所もうけられた。そして自由に外部と通話できるようになつた」との記載がある。同稿に郵便についての項もあり、「郵便函設備（一九五二、八、一四）五カ所にもうけられる。それまでは分館に一カ所あるきりで真夏、真冬は投函にゆくの苦勞していた」という。なお同号掲載の「国立療養所大島青松園年譜【編集部作製】」では「寄附金で公衆電話設置（島外一般と開通）」が1958年2月10日のこととして記載。「園内日誌／《2月1日～28日》」（同第135号、1958年5月）と「園内日誌／《1月20日～2月19日》」（同第123号、1957年4月）に当該記事の記載はない。
- 10 塔の逝去後にその遺骨が分骨される故郷の「両親の墓」



に「塔さんと親族が隠し続けた本名が刻まれる」と伝える新聞報道はまた、彼女が大島青松園「入園当初、姓はそのまま、名を「和子」と変えた」と報せた（『朝日新聞』2014年3月16日大阪本社版朝刊）。なお塔の詩集『希望の火を』（編集工房ノア、2002年）に「孤独」、『第一日の孤独』（蝸牛社、1976年）に「深夜」と題された詩が載るもさきにあげた2編とはそれぞれべつの作品。

- 11 厚生事務次官発国立らい療養所長宛て厚生省発医第125号（1953年9月16日）とその「別紙（一）患者療養心得」は、藤野豊編、解説『近現代日本ハンセン病問題資料集成』戦後編第3巻（不二出版、2003年）に収録。
- 12 前者の典型が前掲安宅『命いとおし』で、後者につい

ては、内田守人『日の本の癩者に生れて一白描の歌人明石海人』（第二書房、1956年）と木村哲也「解説」（同編『癩者の憲章—大江満雄ハンセン病論集』大月書店、2008年）を参照。

- 13 たとえば、『内海詩人』第7号（1954年3月15日）などに詩を寄せた安岡加雄や『海図』第21号（1958年1月15日）の「新人紹介」に登場する庫元久子は、それ以前は『青松』の「児童文芸」欄に投稿していた。また、恵美かおるや鳥栖喬はしばしば『青松』の表紙に載る写真を撮っていた。
- 14 大島青松園での詩作をめぐっては、さきにみた河野進、広瀬志津雄、永瀬清子が「指導」や「選評」をおこなっていた。

表1: 「エチュード」『内海詩人』『海図』書誌情報記事索引目録

タイトル	号数	発行年月日	編集/編者	印刷人	発行所	部数	印刷	表紙	所載	頁数
エチュード	第5号	1951年7月22日	青松詩話会	戸田次郎	青松詩話会	1	謄写版刷り	—	神	11
					「目次」、島内真砂美「破れた屋形船」、上野青翠「腕時計」、山本峰月「病める鳥」、恵美かほる「晴夜」、中石俊夫「夜のいのり」、島内真砂美「月見草」、峰尾わたる「カニユレ」、山本峰月「注射—看護婦は病者の母である」、中石俊夫「郷愁」、峰尾わたる「わくらば」					
エチュード	第6号	1952年1月25日	青松詩話会	K・S	香川県庵治村 大島青松園 青松詩話会	1	謄写版刷り	—	神	16
					「目次」、恵美かほる「手術」、島内真砂美「山羊」、島内真砂美「山羊」、島内真砂美「鏡」、山本峰月「眠れぬ夜は」、山本峰月「果敢ない希望」、戸田次郎「春雨」、上野青翠「夢より覚める」、上野青翠「廃船」、そがの・かずみ「背」、中石としお「顔」、恵美かほる「からくり」、T・N「あとがき」、「エチュード第七号原稿募集」					
内海詩人	第7号	1954年3月15日	山本蔵	政石蒙	香川県庵治局区内 大島青松園内 青松詩人会	1	謄写版刷り	—	神	16
					「目次」、中石としお「モノローグ」、沢藤朗「占ひ」、山沢芳「最悪の地点」、面和子「ひとみ」、香川しのぶ「三月の夜語り」、勝瀬美子「襲来/夜の沈黙/いのち」、中石としお「いやらしい唄/猿と人間と」、山口忠夫「聴診器によせて」、島内真砂美「春立つ日」、山沢芳「内海詩人の発刊まで(その一)」、島内真砂美「こわれた湯呑一故三宅清原にささぐ」、水島秋夫「無題—メモ帖より/雪の朝」、安岡加雄「私」、上野青翠「人生街道をゆく」、山本蔵「揚げ雲雀の唄/海」、山本蔵「編集後記」、「内海詩人第八号原稿募集」、「内海詩人同人」					
内海詩人	第8号	1954年4月20日	山沢芳	政石蒙	香川県木田郡庵治村(庵治局区内)六〇三四ノ一 大島青松園内 青松詩人会	1	謄写版刷り	—	神	20
					「目次」、島内真砂美「モノローグ」、広瀬志津雄【詩論】底抜けに明るい第一芸術の詩を、広瀬志津雄「つぶやき」、恵美かほる「奇禍」、香川しのぶ「停電の寄宿舎」、山口忠夫「愛欲/線」、島内真砂美「黄昏/万年筆の歌—或はスランプとペーソス」、山沢芳「内海詩人の発刊まで(その二)」、中石としお「湖底の女主人」、面かずこ「或る一日」、新名春代「退田」、新名春代「もう一人の私」、水島秋夫「流星/春」、安岡加雄「古い鉛筆」、勝瀬美子「あれは私のもの」、山沢芳「四月」、上野青翠「幻影/庄迫」、芳「編集後記」、「内海詩人会員」、「内海詩人編纂部」(会員募集)、「原稿募集」					
内海詩人	第9号	1954年5月25日	山沢芳	政石蒙	香川県木田郡庵治村六〇三四ノ一 大島青松園 青松詩人会	1	謄写版刷り	—	神	18
					「目次」、恵美かほる「モノローグ」、大島新之介「グット・モーニング—病み呆らうけた頭の体操として」、水島秋夫「雨の午後」、河野進「母の日」の詩、山口忠夫「季節」、勝瀬美子「貴女と私」、勝瀬美子「聖夜におこれる」、新名春代「追憶」、中石としお「暇」、山沢芳「内海詩人発刊まで」、上野青翠「文字庫」、山沢芳「照準」、まさし・ゆきお「俺たちは」、さわ・よしお「内海詩人第一号原稿募集」 つしやいませ舞台の見える場所へ、広瀬志津雄「私」、【編集後記】、「内海詩人編纂部」(会員募集)、「内海詩人編纂部」(会員募集)、「内海詩人第一号原稿募集」					
内海詩人	第10号	1954年6月25日	山沢芳	政石蒙	香川県木田郡庵治村六〇三四ノ一 大島青松園内 青松詩人会	1	謄写版刷り	—	神	16
					「目次」、山口忠夫「モノローグ」、安岡加雄「私」と言う花、山沢芳「梅雨」、香川しのぶ「影のない女」、香川しのぶ「ふささと」、面かずこ「迷へる羊」、上野青翠「初夏の朝風」、上野青翠「あの日から」、勝瀬美子「怒り」、山本蔵「二十世紀の空の涯から」、山本蔵「内海詩人批評会便り」、島内真砂美「丘の芥子坊主」、さわ・よしお「月と海と彼」、大塚俊「沈黙」、水島秋夫「郷愁」、山口忠夫「地下水」、「あとがき」、内海詩人編纂部「内海詩人 会員募集」、「内海詩人 会員募集」、「内海詩人第十一号原稿募集」					
内海詩人	第12号	1955年1月30日	山沢芳	—	香川県木田郡庵治村六〇三四ノ一 大島青松園内 青松詩人会	1	謄写版刷り	—	神	14
					「目次」、「モノローグ」、水島秋夫「手」、中石としお「愛について」、香川しのぶ「人間は自然の意匠であるのか」、まさしゆきお「犬」、山沢芳「明日の日」、島内真砂美「月の運想」、新名春代「行水」、苑部春樹「奔流」、安岡加雄「花」、勝瀬美子「嫉妬/人情」、恵美かほる「不死鳥」、山沢芳「三日月」、内海詩人編纂部「内海詩人 会員募集」、「後記」					
海図	第13号	1956年2月5日	山沢芳	田村敏光	香川県庵治局6034の1 大島青松園内 青松詩人会	1/1	謄写版刷り	木村未一	島 神	28
					「目次」、山沢芳「ほくのメモ」、大島親之介「お願い/宿直/童顔」、山沢芳「軍配の房」、安岡加雄「遠い道/私」、博田美智雄「羨望」、恵美かほる「水仙/掘割」、中石としお「復刊によせて」、山口忠夫「妄執の煙」、水島秋夫「餅を焼く/初雪」、香川しのぶ「戦争のとどろく所一ばい」、中石としお「石について/男と女と」、上野青翠「神々の復活/歌謡母島娘島」、島内真砂美「岸耳草」、勝瀬美子「深秋/天のゆるし/あら野」、新人集(牧明海「修学旅行」、山田千鶴子「夜の空」、多田美佐子「人生の路」、多田朝子「冬」、森正子「白い雲」、岡本みや子「道」)、[あとがき]、海図編輯部「海図第十四号原稿募集」、海図編集部「会員募集」、「会員名簿」					
海図	第14号	1956年3月25日	中石としお	プリント同好会	香川県庵治局6034の1 大島青松園内 青松詩人会	2/1	謄写版刷り	木村未一	島 神	26
					「目次」、島内真砂美「巻頭言」、山口忠夫「少年と雑草」、恵美かほる「春」、勝瀬美子「緒琴うちて/たむとつ」、島内真砂美「末期の眼—故榎井謙兄の歌に寄せて」、中石としお「人魚」、大島親之助「小便」、上野青翠「愛によせて/マリモのゆくえ」、山本蔵「難解な詩に対する疑問」、面かずこ「早春/言葉」、牧明海「眼珠/少年の歌声」、新名春代「若木」、まさし・けんじ「鮎山算え書(その1)島の風景」、山田千鶴子「便り」、博田美智雄「アトキ/砂上の足跡」、中島唯彦「飛行機/シヤボン玉」、新星集(多田美佐子「純白」、馬場照市「朝の空」、森正子「屋下り」、尾根三千乃「木がらし」、徳島広瀬志津雄、全生園光岡良二、東京輝電二郎「反射鏡」、中石としお「あとがき」、「海図15号原稿募集」、海図編集部「会員募集」					
海図	第15号	1956年5月10日	中石としお	プリント同好会	香川県木田郡庵治局6034の1 大島青松園内 青松詩人会	2/1	謄写版刷り	木村未一	島 神	24
					「目次」、上野青翠「巻頭言」、大江滿雄「いまだこかで」、桜井孝「霧の節海」、勝瀬美子「化身/大地」、足立たかと「生きてある」、島内真砂美「夜光虫」、山口忠夫「詩への随想」、山田千鶴子「障碍」、牧明海「春の花/猫」、上野青翠「春潮は動く」、山口忠夫「掌」、多田美佐子「冷波」、馬場照市「妹」、岡本みや子「道」、森正子「母の死」、T・N「あとがき」、「海図16号原稿募集」、海図編集部「会員募集」					
海図	第16号	1956年7月20日	中石としお	プリント同好会	香川県庵治局区内6034の1 大島青松園内 青松詩人会	2/1	謄写版刷り	木村未一	島 神	28

海図	第17号 1956年9月15日	中石としお	プリント同好会	香川県庵治局区内6034の1 大島青松園内	青松詩人会	2/1	謄写版刷り	木村末一	島 神	28
海図	第18号 1957年1月10日	中石としお	プリント同好会	香川県庵治局内6034の1 大島青松園内	青松詩人会	1	謄写版刷り	木村末一	島	24
海図	第19号 1957年3月10日	中石としお	プリント同好会	香川県木田郡庵治局内6034の1 大島青松園内	青松詩人会	2	謄写版刷り	冬山冬雄	島	20
海図	第19号 1957年7月5日	山沢芳	プリント同好会	香川県木田郡庵治局内6034の1 大島青松園内	青松詩人会	1/1	謄写版刷り	—	島 神	20
海図	第21号 1958年1月15日	山沢芳	プリント同好会	香川県木田郡庵治局6034の1 大島青松園内	青松詩人会	1/1	謄写版刷り	—	島 神	20
海図	第22号 1958年6月30日	山本いわお	プリント同好会	香川県木田郡庵治局内6034の1 大島青松園	青松詩人会	1/1	謄写版刷り	—	島 神	20
海図	第23号 1958年8月5日	山本いわお	倉石三郎	香川県木田郡庵治村六〇三四ノ一 大島青松園	海図の会	1/1	活版印刷	—	島 神	22
海図	第25号 1959年2月1日	山本いわお	倉石三郎	香川県木田郡庵治村六〇三四ノ一 大島青松園	海図の会	2/1	活版印刷	木田山泰斗	島 神	20
海図	第26号 1959年4月1日	山本いわお	倉石三郎	香川県木田郡庵治村六〇三四ノ一 大島青松園	海図の会	1/1	活版印刷	木田山泰斗	島 神	30
海図	第27号 1959年7月1日	中石としお	倉石三郎	香川県木田郡庵治村六〇三四ノ一 大島青松園	海図の会	1/1	活版印刷	藤敬子遺稿特集	島 神	32
海図	第29号 1960年1月1日	中石としお	倉石三郎	香川県木田郡庵治村六〇三四ノ一 大島青松園	海図の会	1	活版印刷	鳥栖喬	島	20



	「目次」、重美「巻頭の言葉」、黒田義雄「ある危惧」、山本いわお「ブツペ」、佐々木志保「吾子と共に」、志田浩「秋の雑草」、島さとみ「回転」、板垣冬子「ろの祈り」、早瀬正一「あつものにこらず」、塔和子「昇華」、CAESURA(山本いわお「不幸の産物」、志田浩「深き夜に」)、中石としお「あとがき雑報」、「受贈誌」、「海図第三〇号(原稿募集)」、「同人・会友募集」	木村末一	島 神	24
海図	第30号 1960年4月1日 中石としお 村雨政雄 香川県木田郡庵治村六〇三四ノ一 大島青松園 海図の会 1/1 活版印刷			
	中石としお「おしおのうた一表紙画」に寄せて、「目次」、塔「巻頭の言葉」、石川欣司「昔、ひとびとは……」存在／落葉、小早川慶子「終電車」、塔和子「愛の契約／白い馬」、早瀬正一「りんね／待つところ」、志田浩「枯葉」、佐々木志保「天翔ける幸」、板垣冬子「御旨のままに／苦痛」、島さとみ「泥酔のなか」、荒木某女(《香稿》生と死と恋)、CAESURA(広瀬志津雄「香稿」詩と生活と)、黒田義雄「詩について」、「筆者紹介」、中石としお「あとがき」、「受贈誌十二月〜二月」、「海図第三十一号原稿募集」、「同人・会友募集」	木村末一	島 神	24
海図	第32号 1960年10月1日 黒田義雄 村雨政雄 香川県木田郡庵治村六〇三四ノ一 大島青松園 海図の会 1/1 活版印刷			
	「目次」、黒田「巻頭の言葉」、早瀬正一「虹／狂える者」、あさのしげる「壁の中の部屋」、板垣冬子「泣きたくない／水の輝き」、大野安長「秋の季節」、北見いくお「道」、塔和子「さびしさ／客／翳／瘤／性欲／白鳥」、まさき「けんじ」娘たち(に)、小早川慶子「愛のプリズム」、黒田義雄「永瀬清子さんを迎えて」、SAESURA(広瀬志津雄「香稿 自画像の確立」、塔和子「読書と作詩」、「受贈誌五月〜八月」、黒田「あとがき」、「海図三十三号原稿募集」、「同人・会友募集」	木村末一	島 神	23
海図	第33号 1961年10月10日 中石としお 村雨政雄 香川県木田郡庵治村六〇三四ノ一 大島青松園 海図の会 1/1 活版印刷			
	「目次」、島さとみ「どひら」、あさのしげる「明日のない風景」、小早川慶子「男と女と」、塔和子「包廂の夜／風の空」、佐々木志保「娘」、黒田義雄「短詩三題」、早瀬正一「ドンダリ」の溜息／僕(は)、島さとみ「老眼」、津山比呂志「ひとりごと」、広瀬志津雄「紅葉ケ淵」、早瀬正一「広瀬志津雄さんを迎えて」、「受贈誌九月〜十一月>」、「海図三十四号原稿募集」、「同人・会友募集」、中石としお「あとがき」	木村末一	島 神	24
海図	第34号 1961年5月1日 中石としお 村雨政雄 香川県木田郡庵治村六〇三四ノ一 大島青松園 海図の会 1/1 活版印刷			
	中石としお「虹いろの果実一表紙画」に寄せて、「目次」、早瀬正一「どひら」、塔和子抄「乞食／雪／白紙に／じめいた冬」、早瀬正一抄「枯葉／追憶の窓／生命／耳があるから／骨を数えなくも／ひなたぼつこ」、工藤昇「(香稿)二月のうた」、工藤昇「北国の詩を書きたい」、島さとみ「塔島」、北見いくお「夢の中で」、志田浩「季節風の中」、板垣冬子「生きなければ」、中石としお「白画像」、塔和子「言葉の必然性と純化」について、早瀬正一「詩誌[刻][藤鉄]」について、黒田義雄「詩誌[裸形]」について、「受贈誌十二月〜三月>」、「海図三十五号原稿募集」、「同人・会友募集」	木村末一	神	25
海図	第35号 1961年8月1日 中石としお 村雨政雄 香川県木田郡庵治村六〇三四ノ一 大島青松園 海図の会 1 活版印刷			
	「目次」、北見「どひら」、小早川慶子抄「わたしのたんじょうび／冬の夜の語り／雪／ふたりのメルヘン」、塔和子「サボテン／井戸の、内外」、早瀬正一「四万十川／追われる者／矛盾」、京麗子「かくひつけ」、大野安長「美しい旋律をもつて」、あさのしげる「冬の一章」、板垣冬子「壁の前で」、黒田義雄「影」、中石としお「花と人間」と、塔和子「詩の表現と意識の二重性について一私の詩作ノートから」、「受贈誌五月〜七月>」、「海図三十六号原稿締切」、中石としお「あとがき」	木村末一	神	22
海図	第36号 1961年12月1日 中石としお 村雨政雄 香川県木田郡庵治村六〇三四ノ一 大島青松園 海図の会 1 活版印刷			
	「目次」、江里「どひら」、朝滋夫「夜の聲」、黒田義雄「麻痺」、塔和子「蟬／傷」、小早川慶子「雨朝／月と娘」、早瀬正一「さじのいのり／みんなんで考えよう」、上野青翠「十三階段」、板垣冬子「平凡な」、大野安長「石の存在」、宝州里「病氣より／岩」、塔和子「共同生活と療養者の文学」、「海図三十七号原稿締切」、中石「あとがき」	木村末一	神	26
海図	第37号 1962年4月1日 中石としお 村雨政雄 香川県木田郡庵治村六〇三四ノ一 大島青松園 海図の会 1 活版印刷			
	「塔和子詩集はたか木／猪野陸詩集沈黙の骨広告」、「目次」、塔和子「希望」、江見寛「あまりにも抒情的な死が……—」渡り鳥が南方の海岸に多量うち上げられたという記事からの心象」、塔和子抄「言葉／負気神／過度なる傾れ／不安」、小早川慶子抄「燻瓦／火影」、宝州里「未知ノ欠点から」、早瀬正一「振唄／安楽死／意志」、朝滋夫「沈黙してゆく時に」、中石としお「安全な道」、島さとみ「位置」、板垣冬子「フランス美術展を観て」、黒田義雄「神経痛」、広瀬志津雄「<香稿>ツゼイ>詩への郷愁」、河西新太郎「<香稿>海図36号作品批評」、「受贈誌、中石としお「編集ノート」、「海図三十八号原稿締切」、「西日本放送株式会社広告」	鳥栖喬	神	24
海図	第38号 1962年6月20日 塔和子 村雨政雄 香川県木田郡庵治村六〇三四ノ一 大島青松園 海図の会 1/1 活版印刷			
	「目次」、江見「どひら」、早瀬正一「ひとつの風／それは何?」、宝州里「鳩一ぴかり版画展より」、板垣冬子「曲つた針／事故死」、朝滋夫「巨大な木」、塔和子「傾れ／恥の祭日／禁断／孤立」、塔和子詩集「はたか木」特集(「図書新聞より転載」、塔和子「はたか木」のこと、河本勉「はたか木」出版をえりみて)、宝州里「はたか木」に寄せて、大江満雄「塔和子の詩集」はたか木について」、永瀬清子「はたか木」に寄せて、広瀬志津雄「塔和子詩集「はたか木」について」、河西新太郎「はたか木」について、河西新太郎「はたか木」を読んで、中石としお「はたか木の周辺」、塔「私のノートより」、「受贈誌」、「海図第三十九号原稿募集」、塔、黒田「あとがき」	鳥栖喬	神	24
海図	第40号 1963年2月1日 黒田義雄 村雨政雄 香川県木田郡庵治村六〇三四ノ一 大島青松園 海図の会 1 活版印刷			
	「目次」、早瀬「母の写真」、島さとみ「交通信号」、早瀬正一「忍耐」、宝州里「紅葉のうた／三寸の虫」、大野安長「せいけつな人」、特集「40号よせて(広瀬志津雄「海図」の回帰について)、十国修「海図」のみなさんへ、永瀬清子「手紙」、朝滋夫「明日のない風景」、広瀬志津雄「香稿 紅葉の唄」、塔和子「駭馬／夜」、CAESURA「塔和子「詩と生活」、黒田義雄「詩とつぎあひ」、黒田義雄「幽愁の園」、佐々木志保抄「夫と妻／野の道／夫婦／初秋／黒い小さい蝶／娘／真夏の涼」、「受贈誌、「海図第四十一号【原稿募集】」、黒田「あとがき」	安本一也	神	22
海図	第44号 1964年3月5日 塔和子 村雨政雄 香川県木田郡庵治村六〇三四ノ一 大島青松園 海図の会 1 活版印刷			
	「目次」、中石としお「夜の航海」、佐々木志保抄「雨の舗道／吾が道／記念日／女の讃歌／五月の雨」、宝州里「砂丘にて」、朝滋夫「元旦という日」、瀧川止才代「随筆 流れ」、「海図風信」、塔和子「訪問者／生きてる木は／視点」、塔和子「ひとつの扉一香川県詩人会結成のための会合に出席して」、塔、大野「後記」、「受贈誌」、「海図第四十五号【原稿募集】」、「西日本放送株式会社広告」	鳥栖喬	神	
注1:	「」は原文の転載、「」は目次などからの推測をあらわす。			
注2:	「」は原文での行替えをあらわす。			
注3:	「」は記載すべき情報がないことをあらわす。			
注4:	第16号は表紙の記載は七月廿五日発行。1957年7月5日(表紙には「10日」)発行号は奥付では「第19号」、表紙記載は「第20号」。			
注5:	「所蔵」欄の「島」は大島青松園旧文化会館書庫を、「神」は長島愛生園神谷書庫を、それぞれ蔵書数を「部数」欄に順に記した。双方にあるばあいには、「」のまえが前者、あとが後者の数。			
注6:	現時点での次号は、「エッセー」第1号から第4号まで、「内海詩人」第11号、「海図」第24号、第28号、第31号、第39号、第41号から第43号まで。			

表2：同人会員一覧

誌名	号数	発行年月日	記事名
内海詩人	第7号	1954年3月15日	内海詩人同人
			沢蔭朗 勝賀瀬美佐子 香川しのぶ 面和子 山沢芳 中石としお 恵美かおる 島内真砂美 上野青翠 山口忠夫 戸田次郎 安岡加雄 そがの・かずみ 水島秋夫 山本徹 蔵本憲昭
内海詩人	第8号	1954年4月20日	内海詩人会員
			山本徹 戸田次郎 上野青翠 安岡加雄 水島秋夫 山口忠夫 中石としお 島内真砂美 恵美かおる 蔵本憲昭 そがの・かずみ 山沢芳 新名春代* 面和子 勝賀瀬美佐子 沢芳朗 時広陽子* 香川しのぶ
内海詩人	第9号	1954年5月25日	内海詩人会員
			沢芳朗 勝賀瀬美佐子 香川しのぶ 面和子 新名春代 大塚倭* 山本徹 戸田次郎 上野青翠 安岡加雄 水島秋夫 山口忠夫 山沢芳 中石としお 恵美かおる 蔵本憲昭 そがの・かずみ 島内真砂美
内海詩人	第10号	1954年6月25日	内海詩人会員
			沢芳朗 勝賀瀬美佐子 香川しのぶ 面和子 新名春代 大塚倭 山本徹 戸田次郎 上野青翠 安岡加雄 水島秋夫 山口忠夫 山沢芳 中石としお 恵美かおる まさし・ゆきお* そがの・かずみ 島内真砂美
海図	第13号	1956年2月5日	会員名簿
			戸田次郎 山本徹 三戸忠* 香川しのぶ 恵美かおる 勝賀瀬美佐子 中石としお 面和子 島内真砂美 新名春代 上野青翠 大塚倭 安岡加雄 山田千鶴子* 苑部春樹* 山本幸子* 足立たかと* 多田朝子* 山口忠夫 森正子* 山沢芳 岡本みや子* 倉本憲明 大島 親之介* 多田美佐子*
海図	第19号	1957年3月10日	<海図>同人
			戸田次郎 北見いくを* 水島秋夫 島さとみ* 恵美かおる 黒田義雄* 島内真砂美 中石としお 上野青翠 香川しのぶ 安岡加雄 勝賀 瀬美佐子 苑部春樹 大塚倭 足立孝人 面かず子 山口忠夫 大島親之介 山沢芳 新名春代 まさき・けんじ* 牧明海* 山本徹 山 田千鶴子 冬山冬雄* 竹崎利枝子* 馬場照市* 亜川ひろし*
海図	第19号	1957年7月5日	海図同人
			水島秋夫 戸田次郎 北見いくを 黒田義雄 島さとみ 恵美かおる 上野青翠 島内真砂美 中石としお 勝賀瀬美佐子 香川しのぶ 安岡 加雄 足立孝人 苑部春樹 大塚倭 大島親之介 面かず子 山口忠夫 まさき・けんじ 山沢芳 新名春代 山田千鶴子 牧明海 山本い わお 馬場照市 冬山冬雄 竹崎利枝子 亜川ひろし
海図	第21号	1958年1月15日	—
			戸田次郎 中石としお 大島親之介 島さとみ 安岡加雄 まさきけんじ 島内真砂美 大塚倭 山田千鶴子 香川しのぶ 山口忠夫 馬場照 市 苑部春樹 新名春代 亜川ひろし 面かず子 山本いわお 庫元久子* 山沢芳 竹崎利枝子 勝賀瀬美佐子 牧明海 水島秋夫 足立 たかと 冬山冬雄 上野青翠 北見いくを 恵美かおる
海図	第22号	1958年6月30日	<海図>会員
			戸田次郎 北見いくを 水島秋夫 島さとみ 恵美かおる 黒田義夫 島内真砂美 中石としお 上野青翠 香川しのぶ 安岡加雄 勝賀瀬美 佐子 苑部春樹 志田巨* 足立孝人 面かず子 山口忠夫 大島新之介 山沢芳 新名春代 まさきけんじ 牧明海 山本いわお 山田千 鶴子 牙城徹* 竹崎利枝子 馬場照一 亜川ひろし 庫元久子 鳥栖喬*
海図	第23号	1958年8月5日	海図同人
			戸田次郎 水島秋夫 恵美かおる 安岡加雄 上野青翠 中石としお 足立孝人 山口忠夫 山本いわお 山沢芳 苑薫* 島内真砂美 冬 山冬雄 馬場照市 北見いくを 島さとみ 黒田義雄 大島新之介 鳥栖喬 志田巨 まさき・けんじ 新名春代 牧明海 勝賀瀬美佐子 面 かず子 香川しのぶ 山田千鶴子 竹崎利枝子 藤敬子*

注1:人名は旧漢字を新漢字にかえたほかに原文のとおり。  
 注2:当該号に掲載された新たな人名に\*をつけた。  
 注3:—は記載すべき情報がないことをあらわす。  
 注4:1957年7月5日(表紙には「10日」)発行号は奥付では「第19号」、表紙記載は「第20号」。